

## 絵葉書に残る百年前の世相

「絵はがきの時代」(細馬宏通著)

透かし絵はがきをご存じだろうか。例えば五月晴れのパリのオペラ座の絵柄がある。それを暗闇でろうそくの光にかざす。すると場面はにわかには夜景に転ずる。月明かりの雲間の下、歌劇場の窓には照明がともる。透かし絵の発達は、欧州高緯度地帯ならでは、長き薄暮の産物だったのではないか。そう著者は自問する。

江戸時代後期の日本に舶来された眼鏡絵にも、「透かし」技法は知られる。この技法が、二十世紀初頭には、絵はがき版にまで圧縮され、転生を果たしたことになる。

時代は折から絵はがき全盛期を迎えていた。その背景には、欧米各国での私製はがきの使用許可や風景絵はがきの隆盛がある。本邦でも一九〇〇(明治三十三)年開始の年賀状元旦配箋と、日露戦争下での絵はがき需要の劇的増大が見逃せない。

漱石の小説「三四郎」(明治四十一年新聞掲載)で、なぜ美禰子は封書ではなく、絵はがきを三四郎によこすのか。封書は手紙の秘密を封印する。反対にはがきは、隠すべき秘密などないことを、あけすけに第三者に公言する。そしてひとり受取人だ

けは、謎に直面する。それがほかならぬ「迷へる子羊」の謎。「露悪家」美禰子を造形するための最良の小道具こそ、見事に「不用意」な、この近年流行の郵便媒体だった、と著者はみる。

本書は、絵はがきの黄金時代を、百年後の今日から振り返る。著者のまなざしは、好事家の惑溺(わくでき)とは一線を画す。縦糸は、立体写真やセルロイド製品など、この時代に産み落とされた特異な証拠物件。横糸は山岳観光史や万国博覧会、東京大水害の記録、マニアむけ専門誌の盛衰から印刷技術史に至る。そこに視覚文化が未曾有の技術革新を体験した時代ならではの世相が浮き彫りにされる。

時代を描きとめつつ時代を漂流し、欧州の古本屋に漂着した末、筆者が救出した異国の挿絵入り郵便物たち。日本製を含むこれらの遺留品たちは、残る筆跡や画鋸(がびょう)穴に、かろうじて世界遍歴の痕跡を留めるばかり。だが人は、そこに隠された来歴を発掘する誘惑から逃れられない。(稲賀繁美・国際日本文化研究センター教授)

(青土社・2310円) = 2006年6月8日④配信